

闘う身体はどこで語ればよいのか

——空手の身体と言説の秩序への記号論的一考察——

大山 智徳・湯淺良之助

(受付 1999 年 5 月 6 日)

目 次

- 0 はじめに
- 1 記号論について
- 2 身体について
- 3 身体技法の継承について
- 4 闘う二身体間の関係について
- 5 闘う身体はどこで語ればよいのか

0 は じ め に

社会学はこれまで対象をどこで語ってきたのだろうか？対象の外から？それとも対象の内から？いったいどこから語ってきたのだろうか。これは、二つの言説、対象を外から語る実証主義的な言説と対象を内から語る現象学的な言説という既成の言説に対応している。記号論はどうだろう。F. ソシュールの言語学を源流とする差異による言説の可能性はないだろうか¹⁾。差異を原理とする言説の可能性はないだろうか。差異は対象とそれを語る空間という言説のルールさえも解除していくのではないだろうか。本稿では、第三の言説の可能性を差異を原理とする記号論を援用することで試みたい。

1) 大山が第56回西日本社会学会大会（1998. 5. 16）において「消費モデルと『差異』について—差異をモデルの要素とすることは可能か—」という発表で差異を要素とするモデルの論理的可能性を問うた。本稿は、その回答として、差異と対象としてのモデルのみならず、差異と対象を語る位相との関係も含めて新しい言説の可能性を探求する。

対象はフッサールの「他者」とウィトゲンシュタインの「痛み」という極めてラディカルな問題意識の交差する空間に浮かぶ闘う身体としよう。また、実証性を確保するため、筆者の一人である大山が20年来接してきた空手を闘う身体の一つの身体技法として、闘う身体の部分集合として考察していこう。空手という闘う身体の手技の継承と生成について考察しながら、身体を語るにふさわしい空間が何かを考えていきたい。もし、闘う身体を記号論でうまく語ることができれば、実証主義的な言説、現象学的な言説に続く、新しい言説—差異による言説—が生まれたことになるのではないか。

本稿では、闘う身体として空手の身体技法を考え、記号論を援用しながら考察し、新しい言説の可能性を提示する。

1 記号論について

① 記号論5つの概念

記号論と言っても、社会学ではあまり一般化されていないので記号論についての基本的な5つの概念について紹介しておく。5つの概念とはシニフィアン（以下、SAと表記する。）、シニフィエ（SE）、デノテーション（D）、メタ言語（M）、コノテーション（C）である。

記号はSAとSEから構成される。SAとは意味するもの、SEは意味されるものである。たとえば、バラを考えよう。／ba・ra／という音が「植物のバラ」という概念と結びついてひとつの記号「バラ」を構成する。ちなみに、SEは概念であり、時空に定位されるバラである必要はない。

次にD。これは「バラそのもの」である。現象学の用語を用いれば、「エポケー後のバラ」ということになる。

さて、このDをSAとする記号がCである。逆にDをSEとする記号がMである。

少し、抽象的でわかりにくいので、「バラ」を使って説明しておく。Dとしてのバラが好きな異性に贈られるとき、このバラは愛を表現するバラと

なる。このときの記号関係がCである。

逆に「バラとは……である。」というような辞書や百科事典にある言説となるとき、この記号関係はMである。

なお、D, C, MのSAとSEをそれぞれ、DSA, DSE, CSA, CSE, MSA, MSEと表記する。

記号論はこの5つの概念の組み合わせで、さまざまな文化現象を捉えようという方法である。

これを図示しておこう。

<C>			<M>		
CSA		CSE	MSA	MSE	
DSA	DSE			DSA	DSE

なお、CとMは幾層にも組み合わせることができ、積み上げることができる。

もともと、記号論は現象学と深い関係があり²⁾、数学とも親近性がある³⁾。つまり、記号論は意味と演繹の可能性を含んでいるのだ。

② 記号の三様相

さて、この記号をSAとSEの関係から一方向、双方交流、切断・接合の3つに分類して、それぞれ固記号、閉記号、開記号としておく⁴⁾。

記号は3種類からなるとする。

固記号はMSAが不変で、非対称で、一方向にMSEを規定し、DSAと

2) 金田晋氏によると「現象学が記号論、言語論に大きな影響を与え」（金田 1973: 144）たという歴史的事実があり、記号論と現象学の近さの一端が理解できた。

3) 数学の記号はここで言うSAに近い。

4) 大山が生活経済学第14回研究大会（1998. 4. 25）で「『生活者』の可能性—現代消費社会における「生活者」の記号論的位相について—」という発表を行い、そこで記号の三様相を初めて発表した。

DSE では DSE が強い。また、MSA への遡及禁止も入れておこう⁵⁾。閉記号は MSA と MSE, DSA と DSE が双方向に交流する。

開記号は MSA と MSE, DSA と DSE が無関係に切断、接合する。

これを記号の三様相としておこう。図式化すると次のようになる。

<記号の三様相>

固記号 (α)	閉記号 (β)	開記号 (γ)
MSA \rightarrow MSE 1	MSA 1 = MSE 1	MSA 1 / MSE 1
MSA \rightarrow MSE 2	· ↓	↑ ↓ ↑ ↓
MSA \rightarrow MSE 3	MSA 2 = MSE 2	MSA 2 / MSE 2
·	· ↓	↑ ↓ ↑ ↓
MSA \rightarrow MSE n	MSA n = MSE n	MSA n / MSE n

以上で、本稿で用いる記号論の基本概念は終わりである。

2 身体について

① 身体の記号論的構造

身体を近代の伝統にしたがって、肉体と精神から構成されるものとする。しかも、精神が肉体を定義できるという図式を採用しよう。これを図式化すると次のようなモデルができる。

身体は SA である精神と SE である肉体から構成される。これを D の身体とする。

この D を SA とする C を考えてみよう。

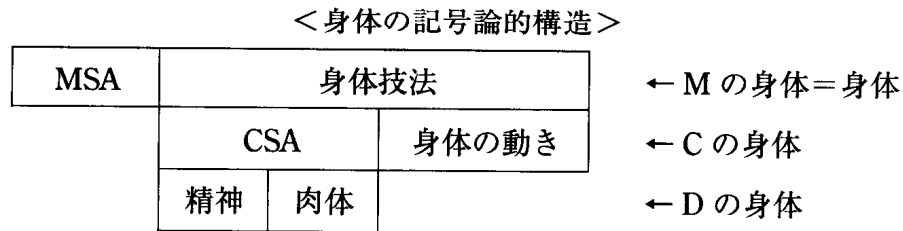
C としての身体は CSA としての D の身体と CSE としての身体の動きから構成される。これが、身体技法である。

さらに、この C を SE とする M を考えてみよう。

5) 大山が第 7 回数理社会学会大会 (1989. 3. 11) で「文学の基礎に関するいくつかの仮定」という口頭発表を行ったが、その中で「古代文学では作者の意図探しは禁じられている。」という遡及禁止について触れている。

つまり、Dとしての身体と身体の動きをSEとするMである。このレベルではじめて、身体はそれに言及する言説を備えた記号となるのである。本稿でも、このMのレベルの身体を身体と呼ぶことにする。

これを図にしておこう。



② 身体の三様相

この記号の三様相を身体に応用してみよう。

ア 身体の固記号について

MSE がどんなに変わっても記号の構造は変わらない。そして、MSE についての言説、すなわち MSA が不変で、かつ非対称で、一方向の場合が固記号である。

具体的にはどんな身体だろう。たとえば、マス・ゲームの身体はどうだろう。あるいは、儀礼の身体はどうだろう。洗脳された身体はどうだろう。脅迫された身体はどうだろう。社会学的な観点からは原－労働者の身体はどうだろう。あるいは、無意識を備えた身体はどうだろう。性関係ではストーカーはどうだろう。これらの身体ではいずれも自身の身体を定義、規定するのは他者であり、しかも非対称で一方向であり、MSA への遡及は禁止ないし、不可視となっている⁶⁾。

SA と SE の関係は $SA < SE$ で、 $SA=0$ の場合さえある。いずれも、MSA と MSE の関係は非対称で、一方向に規定されている。

これが、固記号の身体モデルである。固記号の身体を受動身体と呼んで

6) このうち、無意識は少し緩やかである。

おこう。

社会学の中で考えるとデュルケームを想起するとよい。自殺という現象を他者による定義から考察したのが、すなわち、受動身体として考察したのがデュルケームの「自殺論」である。自殺を文字どおり SA としての精神、自己決定による SE としての肉体の抹消、 $SA > SE$ の結果と捉えるのではなく、MSA にその原因を見いだし、分析を試みようというのである。考えてみると受動身体という考え方はフーコーにも見いだされる社会学の重要な言説戦略を含んでいる⁷⁾。

イ 身体の閉記号について

D の身体内部 (=精神と肉体)、MSA と MSE の間に豊穡なる関係があるのが身体の閉記号である。MSA と MSE は相互に影響しあい、交流しあう。たとえば、近代の身体。身体の定義、規定は自身の身体、自己=精神にある。記号化して、次のように表記しておこう。 $SA \Leftrightarrow SE$, $MSA \Leftrightarrow MSE$ 。これは閉記号で、この身体を能動身体としておく。ここでは多くの説明は不要であるが、たとえば、夜明けのランナー、階級意識に目覚めた労働者、愛し合う恋人たちの身体はどうだろう。

これらの身体は記号内部で無限に生成する。

社会学の中で考えるとウェーバーの理解社会学からシュッツの現象学的社会学 (エスノメソドロジーも含む。) へと至る系譜である⁸⁾。

7) 内田隆三氏が「〈構造主義〉以後の社会学的課題」という論文において、社会学におけるフーコーの位置づけをデュルケームの系譜で論じているが (内田 1980), 本稿の記号モデルでも同じことが言える。

また、フーコーが「主体」を分析するときは、能動身体を MSE とするメタ言語を構築し、その MSA を考察している。

8) 理解には D の内面=精神が存在しなくてはならない。能動身体こそ、近代の理想的な身体モデルである。そして、この身体を内部から語るには現象学がもっともふさわしい。なお、大山が「志賀直哉の『城の崎にて』をめぐって—私小説・記号論・視線のパロッキー—」(『文学空間第 2 号』広島大学文学の会 原稿受理済み) で言説の秩序について触れている。

ウ 身体の開記号について

解体された身体とでもいうべき身体である。精神と肉体は切断され、身体と身体と言説は他の身体や身体への言説と自由に結合する。「／」を乖離の記号とすると「精神／肉体」、「身体と言説／身体」の関係である（ただし、緩やかな中心あり）。

たとえば、舞踊する身体、闘う身体等はどうだろうか。身体の定義、規定が不定、もしくは未定の身体。もはや、自己の肉体は自己の精神とは無関係に他者の肉体と関係し、自己の精神は自己の肉体とは無関係に他者の精神と結びついている身体。

舞踊する D の身体はそれを見る他者の D の身体、特に視覚によってそれを見る他者の精神と関係を結ぶ。肉体表現の緩やかな中心としての舞踊する D の身体の精神は、もはや大した意味は持たない。自身の肉体の一つの中心としての精神は他者の身体へと拡大される。このとき、D の身体の定義は他者によって限りなく増幅していく。さらに、MSA は演出家という他者である。身体は他者によって構築される⁹⁾。

記号構造を自由に解体、再構築、接続、切断、越境する身体である。D の精神も肉体も、MSA と MSE も自由に接続、切断するため、記号外部を求めて無限に生成する。

社会学の中での本格的な展開は未だないようだが、身体論の展開の中ではいくつか萌芽がある¹⁰⁾。社会学の中での本格的な展開は未だないというの

9) 大山が第46回広島芸術学会例会（1998.12.13）で「身体思想と表現—闘う身体・記号論・芸術学的可能性—」という口頭発表を行い、踊る身体と闘う身体と比較を行っている（学会誌である「芸術研究」に投稿中）。

10) 内田隆三氏が約20年前に開記号の原理の社会学史への応用を試みている（内田1979）。

身体論の中では『ソシオロジ No. 111』（1991.6）で「小特集 身体と社会」が掲載されており、その中で亘明志氏による『身体とメディア—身体のパラドックスをめぐって—』という論文は「言説と非言説的实践のもろもろの力線が錯綜する場である。」（P.41）との立場から身体とメディアの関係が考察してあるが、これも、開記号による身体論理解の一つであろう。

は開記号の原理に内包されているからである。なぜなら、哲学を除くすべての「学」はノーマライゼーションによって「学」と呼ばれ、開記号は方法というオートマティズム、アルゴリズムを切断して、いくつもの方向転換をするからである。したがって、哲学の言説としてドゥルーズ＝ガタリの著作に開記号の展開を見ることが出来るのも自然なことである。しかし、「社会学」として、彼らから思い切って「方法」を取り出し、積極的な社会学における展開も必要ではないだろうか¹¹⁾。

以下、身体の様相を表のとおりまとめておく。

〈身体の様相〉¹²⁾

系	様相	M	性 質	身体記号
α	固記号	$MSA > MSE$	MSA は不変で MSE のみ可変	受動身体
β	閉記号	$MSA \leq MSE$	MSA と MSE は相互に作用	能動身体
γ	開記号	MSA / MSE	MSA と MSE は無関係に揺れる	差異身体

系	MSA	D
α	他者が定義、規定する身体	精神 < 肉体, 精神 = 0
β	自己が定義、規定する身体	精神 > 肉体, 精神と肉体の相互交流
γ	差異が定義、規定する身体	精神 / 肉体

3 身体技法の継承について

これまで、身体の記号論的構造を提示したが、本節ではいよいよ闘う身体を語っていくことにする。闘う身体もさまざまあるが、本稿では始めに述べたように空手を考えていく。ここでも、空手の身体と記号の関係を見ていくが、まず、空手の身体を定義しておこう。空手は武道であり、これ

11) 未だ完成していないが、黒石晋氏による「欲望のエネルギー論」はドゥルーズ＝ガタリを社会（経済）学に直接応用しようと言う壮大な試みであり、今後に注目したい。

12) 4) に同じ。身体記号が新しいだけで他の箇所はほぼ同じである。

はある身体技法の継承をする身体であることを意味する。また、武道であることから空手は闘う身体である。つまり、空手の身体は継承する身体と闘う身体の二重身体として意味づけられるのである¹³⁾。では、何を継承するのか。継承するのは空手の身体技法である。その身体技法を遡及していくとそこに空手の流派の創始者の身体技法がある。つまり、創始者の身体技法を継承するのが継承する身体の一つの側面である。もう一つ、闘う身体はどうか。これは、他者を前提とした強さである。この強さは闘う局面で具体的に実証される。実証性を伴った強さである。闘う身体はこの具体的な強さを希求する。

武道の身体とは「強さを希求しながら、創始者の身体技法の継承を行う二重の身体」と定義しておこう。

さて、本節では継承する身体を記号論を援用しながら、考察していく。

ア 武道の三様相

前節で身体の記号論的構造を提示したが、空手の身体を記号論を使って記述してみよう。Mの身体はMSAプラスMSEの身体技法であった。このレベルで空手の身体を考えると空手の身体はMSAプラス身体技法という構造になる。

この身体に記号の三様相を応用して考えてみよう。

まず、空手の固記号。固記号は他者が身体技法を定義する状態だから、身体技法の継承を考えるとよい。強さを体現した身体技法をそのまま継承するということである。非対称で一方向で、その身体技法に疑いを挟まない身体である。

次に空手の閉記号を考えてみよう。閉記号はMSAとMSE、SAとSEが

13) 大山智徳 1998「日本の道場と日本型クラブの可能性」『生涯スポーツの時代のスポーツクラブづくり―「チーム」から「クラブ」へ―』（財）広島県体育協会スポーツ科学委員会スポーツマネジメント班，p.22で武道の身体が二重の身体であることを提示した。

相互交流する構造を有していた。また、自己が自身の身体を定義する記号構造であった。この状態を空手の身体に当てはめると継承された身体技法を再度、自己が再定義可能な身体である。つまり、身体技法を変換する可能性を含んでいる身体である。空手の閉記号は身体技法の変成・生成を考えることが可能な身体である。空手の閉記号の存在は固記号との関係を考えて分派活動、破門、断絶、他流派の成立等の社会学的課題が生まれる身体である。

最後に空手の開記号を考えてみよう。開記号は MSA と MSE, SA と SE が自由に切断され、他の記号と自由に接合する記号であった。また、差異が身体技法を決定する状態である。これを空手の身体に応用すると身体技法の解体・創造が考えられる。ここでは、強さを希求しつつ、身体技法のルールの変更が考えられるのである。空手の身体技法は基本的に殴る、蹴る、投げる、つかむ、ひねる (関節技)、噛む、締る等の闘う身体のうち、突き・蹴りを攻撃技とする身体技法である。しかし、この空手の開記号は殴る・蹴るという身体技法を解体して、自由に他の身体技法と結びつくのである。空手の身体技法は継承された身体技法から切断され、解体し、他の身体技法と結合するのである¹⁴⁾。

イ 流派の生成について

さて、この空手の身体を時系列に沿って考察してみよう。

まず、創始者の身体。これを 0 度の身体としておこう。いわば、空手の原記号の誕生である。様々な身体技法から選択により一つの身体技法を確立するのが、創始者の身体である。しかも、この 0 度の身体は強くなくてはならない。創始者の身体は多くの闘う身体という全体集合から部分集合を確定する身体でもある。創始者はある身体技法を創始する身体である。デ

14) しかし、この開記号の身体を空手の身体と呼ぶかどうかは考察の余地がある。むしろ、開記号がそもそも一つの記号として定位可能であるのかどうかさえも考える必要がありそうだ。

ノテーションの身体といってもよい¹⁵⁾。

続いて、一番弟子の身体が考えられる。創始者の圧倒的な強さを信じ、その身体技法を継承する身体である。これは、固記号の誕生である。0度の身体に「強い」という言説を加える身体でもある。これはメタ言語として理解可能である¹⁶⁾。これは1度の身体である。

さて、固記号はメタ言語によって神話化され、次々と「強さ」の言説に惹かれた身体が継承された身体技法を継承しようと集まってくる。固記号の継承である。ここに、闘う身体の一つの系譜としての継承された身体が誕生する。流派の誕生と発展である。0度の身体技法は他の身体を伝わり、次々と継承されていくのである。この身体技法の継承という運動が武道の基本形である。これは、n度の身体である。

ところで、この流れを記号の三様相で整理しておく次のようになる。まず、さまざまな闘う身体技法が存在する。これは、差異身体である。続いて、創始者の身体が誕生する。これは能動身体である。そして、弟子の身体が次々と誕生していく。これが固記号である。

流派とは固記号の身体の集合体である。

ウ 流派の解体について

さて、次に流派の解体を考えてみよう。流派とは固記号の身体の集合体である。すると流派の解体とは固記号の解体に他ならない。この動きをシュミレートしてみよう。

空手の身体は、固記号の継承であると同時に強さを希求するものであった。創始者の強さは各流派で物語・神話として流布するが、同時に強い身体を継承している身体は実証性を流派内部でのみに限定し、他流試合は禁じられるのが普通である。しかし、ここに、実証主義者が登場すると様相は大きく変化する。「強さ」を求めて他流派、異種格闘技に挑戦する身体の

15) このMの身体をDの身体とするのは任意である。

16) 15)に同じ。

登場である。この身体は能動身体である。この身体は流派のトップの了解があったり、なかったりのうちに実証性のある結果をもたらす。

この実証性において勝った方はもともと強いことから、これまでの身体技法に大きな変化は見られない。ところが、負けた方はさらに努力したり、新しい身体技法を考えたり、ルールの変更まで考えることが要求される。

負けた流派の 3 つの合理的選択を考えてみよう。

まず、固記号から固記号へという接続関係が考えられる。これまでの身体技法に誤りはなかったが修行が足りなかったから負けたという理解の上に継承された身体技法を磨くため、さらなる努力をするという構造である。あるいは、負けたのは個人の責任であり、流派には無関係であり、実証された結果を無視するのである。したがって、これまでどおり身体技法を継承することとなる。

次に、固記号から閉記号へという構造を考えてみよう。新しい身体技法、たとえば、ローキック、後ろ回し蹴り、踵落としといった技で負ければこの技を獲得しようとするのである。つまり、創始者の身体技法に新しい身体技法を加えるのである。しかし、この身体技法は空手というルールの枠内での改革である。

最後に固記号から開記号への接続関係を考えてみよう。ルールの追加、変更といった場合である。空手に投げやつかみ、間接技などを加えるのである。創始者の身体技法のタブーを破ることになるが、同時に新しい身体技法も創造されるのである。しかし、このルールの変更は異なった身体技法であり、厳密には創始者の身体技法の継承とは言えない。たとえば、「創始者は強かった。したがって、その精神を受け継ぎ、原点に帰り、新しい身体技法を身につけることが真の継承者だ。」という言説は強さという SE による継承された身体技法の組み替えであり、実質的には新しい流派の誕生である。

強さの実証は固記号の解体をもたらし、流派存亡の危機に瀕するから、流派の観点からはメリットは乏しい。流派にとって能動身体は極めてリスク

の多い身体である。

空手の継承の基本は固記号であり、固記号から他の記号へ変化するとき、流派にとって大きな変化があり、記号の三様相の循環が空手の身体の歴史でもある。

ここで、以上の流れを図にしておこう。

〈空手の身体の流れ〉

様々な身体技法→創始者→継承者

- ① これまでどおり・流派の存続
- ② 新しい身体技法・(流) 派の変更
- ③ ルールの変更・流派の解体・創造

〈記号の歴史〉

開記号→閉記号→固記号

- ① 固記号→固記号……流派の存続
- ② 閉記号→固記号……(流) 派の変更
- ③ 開記号→閉記号→固記号……流派の解体・創造

4 闘う二身体間の関係について

前節では継承の視点から複数の空手の身体を考察したが、本節ではミクロな局面、すなわち二身体間の闘う身体を考えてみよう。ミクロな闘う身体は二身体の関係である。二身体間の記号の関係について考えながら、闘う身体を考察していくことにする。

ここでは身体の結合関係を二項で順序なしの関係を仮定し、6とおりの関係を分析することにしよう。なお、この闘いは1回限りの場合に限定する¹⁷⁾。

17) 身体の三様相の二体間の関係については、大山が第46回広島芸術学会例会(1998.12.13)の配布レジュメで簡単に触れたが、当日は時間の関係で言及できなかった。

また、闘う身体を含む身体の可能性について1回の場合という条件をつけたの 入

受動身体を α , 能動身体を β , 差異身体を γ と表記し, α と α との関係を $f(\alpha\alpha)$ と表記する。(以下, 同じ)

① $f(\alpha\alpha)$

MSA が不可視のまま二つの肉体が結合, 乖離する関係である。

異なった流派の闘いの場合は, 理念的にはお互いの流派の創始者の身体技法同士の闘いとなる。勝者の流派では創始者の神話は強化され, また, 流派の身体技法の優秀性も証明される。一方, 敗者の流派は創始者の神話の存続のため, 敗者個人の修行の達成度の言説に還元され, 身体技法はこれまでどおり存続することになる。(もし, 変革を伴えば, その時の身体は受動身体ではない。) 実際には, 他流試合は禁止されているため, こうした局面は極めて少ないことが予想される。

また, 同一流派内の闘いでは受動身体のみである。

② $f(\alpha\beta)$

受動身体と能動身体の闘いである。力関係を 3 つに分け, 考察してみよう。

a $\alpha > \beta$

受動身体が能動身体に勝った場合である。

同一流派の場合, 受動身体は受動身体のみである。一方, 能動身体は受動身体の継承してきた創始者の身体技法の部分集合ということになり, 創始者の身体まで遡及できない。また, 能動身体は自身の身体技法と自身への信頼 (MSE との MSA の双方向交流) が絶たれるため, 再び, 受動身体へと回帰する。

他流派との場合は, 受動身体に属する流派は優秀性が証明され, 能動身体に属する流派にとっても, 「修行の足りない個人のやったこと」という言

↘ は無限回の場合とは異なった結果がでることが予想されるからであり, 無限回の場合については別稿で詳細に論じる予定である。

説に回収され、どちらの流派の身体技法も存続する。

b $\alpha = \beta$

引き分けの場合である。

他流派の闘いの場合、受動身体は受動身体のまま、能動身体は能動身体のみである。ただ、受動身体にとっては、創始者の身体技法以外の身体技法と引き分けることは、創始者の身体技法と対等な異なった身体技法があることになり、創始者の神話にとってはマイナスとなる。能動身体の方は新たな身体技法の創始者になる資格を獲得することになる。引き分けならば、能動身体は受動身体へ遡及可能である。このことは前節で触れたように受動身体の属する流派にとっては大きなマイナスであるため、絶対勝てる能動身体としか闘いはしないのが受動身体の合理的選択である。

また、同一流派の中では能動身体は異端、もしくは分派のリーダーとして生き残ることとなる。

c $\alpha < \beta$

能動身体が受動身体に勝った場合である。

他流派との闘いの場合、受動身体の属する流派の身体技法も創始者の神話も崩れ去る。受動身体は能動身体の新しい身体技法の優秀性を承認せざるを得ない。このとき、能動身体が受動身体の創始者の強さと身体技法の言及の仕方に、流派の存続が関わってくることになる。いずれにせよ、受動身体の不可視の MSA である「創始者の強さ」に勝った能動身体が言及すれば、実証された強さの前で、他の受動身体は瞬間的にせよ、「創始者の身体技法」への懐疑が生じ、能動身体に記号関係が変わる。また、能動身体が「創始者の強さ」という神話を継承すれば、その流派の幹部となる可能性を秘め、「創始者の強さ」という神話を否定すれば、新しい流派の創始者になる可能性がある。これは受動身体の属する流派の衰退や終焉にいたることになる。ただ、多くの受動身体にとっては、身体技法の根拠が創始者の身体技法から能動身体の身体技法に変わったり、創始者の身体との距離、序列が n 度の身体から 1 度の身体へと変わったとしても受動身体であるこ

とに変わりはない。

同一流派においても、同じである。

③ $f(\alpha\gamma)$

受動身体と差異身体である。

a $\alpha > \gamma$

受動身体が差異身体に勝った場合である。受動身体が継承された身体技法でルールなしのストリートファイトで勝った場合などで、差異身体は受動身体の前で無化される。強さを希求する差異身体であれば、純粋に身体技法を見直すこととなる¹⁸⁾。

b $\alpha = \gamma$

受動身体と差異身体が引き分けた場合である。差異身体は流派という閉じた集合を形成せず、さまざまな身体と次々と闘っていくことになるので、この引き分けは差異身体にとっては「負けではない。」という意味でプラスであろう。一方、受動身体は創始者の神話が揺らぐので、マイナスである。ただ、差異身体は流派という創始者の神話自体には興味を持っておらず、ただ、優れた身体技法を希求しているので、強さの希求者として生きていくことになる。

c $\alpha < \gamma$

差異身体が受動身体に勝った場合である。

受動身体 of 身体技法と創始者の身体技法への神話が揺れることとなる。受動身体にとっては大きなマイナスである。差異身体は、受動身体 of 身体技法のルールの外におり、このことは受動身体 of 身体技法は差異身体 of 身体技法の部分集合であることを意味する。

受動身体 of 流派は大いに揺れ、解体の危機に直面する。受動身体にとっ

18) また、すでに20年前、大山もこういう体験をしたが、受動身体にとってはこの関係は何のメリットもない。親しい空手仲間が飲んだときの昔話としてしか機能していない。

ではこの局面を作らないことと、もし、こうしたことがあれば、なかったことにする等、大きな神話作りが必要となる。

④ $f(\beta\beta)$

自身の身体技法への信頼があり、精神と肉体の理想的な関係の能動身体同士の闘いである。自身でも技を工夫し、創造し、また、お互いが闘いの中から技を磨きあう関係である。流派の闘いではなく、継承された身体技法と自身の発明した身体技法の闘いである。

⑤ $f(\beta\gamma)$

能動身体と差異身体の闘いである。

a $\beta > \gamma$

能動身体は差異身体を一つの閉じた身体、精神と肉体のバランスのとれた関係とみなそうとする。差異身体は能動身体に敗れた理由を能動身体の精神と肉体の内部で循環するベクトルとみる可能性もある。差異身体は自由に能動身体の精神と結びつくことが可能であり、差異身体が能動身体になる可能性もある¹⁹⁾。

b $\beta = \gamma$

能動身体も差異身体もこれまでどおりである。

c $\beta < \gamma$

能動身体は差異身体の身体技法を積極的に取り入れようと努力する。ただし、差異身体のベクトルが外部の記号を求めて外を志向するというのは理解できない。あくまで、能動身体内で循環するベクトルの中で差異身体の身体技法のみを取り入れようとする。

19) 夜の繁華街を肩で風を切りながら歩いている者が入門し、スパーリングで己の力不足を知り、修行に精励することもある。刀を振り回す（差異身体）より、鞘に収まった刀（能動身体）の方が次元の異なった強さであることを実感するようだ。一般的にぎらぎらした目つきから表情がソフトになる。

差異身体は変化なし。

⑥ $f(\gamma\gamma)$

多様な身体を生成する、増殖する身体の闘い、差異身体同士の闘いである。勝っても負けても差異身体に変化はない。

5 闘う身体はどこで語ればよいのか。

では、闘う身体はどこで語ればよいのか。

それを考えるため、MSA と MSE をそれぞれ語る空間と対象とし、これに記号の三様相を適用して考えよう。これを言説の三様相と呼んでおく。

固記号は非対称で、一方向、遡及禁止等の性質を有していた。これを言説の局面に応用すると対象は変わっても語る空間は不変という構造が現れる。

閉記号は MSA と MSE が豊かに交流する性質を持っていた。閉記号の言説は語る空間と対象が豊かに交流する。

開記号は MSA と MSE が切断、結合する性質を持っていた。開記号の言説は語る空間と対象が無関係に切断、結合する場合である。閉じようとする言説空間から自由に飛び出し、自由に接合する。これが開記号の言説である²⁰⁾。

20) 言説の三様相、とりわけ、開記号の言説を認めると 2 の②のウで述べたように「学」としての同一性が保持できなくなるかも知れないが、闘う身体は差異を内包させており、それを語る空間にも差異を拡張することは論理的に可能である。

まず、「はじめに」で言及した外からの実証主義と内からの現象学との関係を言説の三様相でみておこう。

コペルニクスの地動説やガリレイの落下の法則の発見は語る空間と対象の豊かな交流であることから閉記号である。また、フッサールの現象学も「記述」という概念に結実しているように、語る空間と対象が豊かに交流していることから閉記号である。ともに言説の三様相からは同じ閉記号ということになる。つまり、実証主義も現象学も同じ閉記号に属している。違いは、実証性の水準である。物理的なモノと志向する対象すべての違いである。大きく異なるとされる実証主義

これまで、継承する身体と闘う身体を見てきたが、いったい、この身体を語るにはどこを語ればよいのだろうか。

受動身体は MSE に作用する始点としての MSA の分析を、能動身体は MSA と MSE の交流を、そして差異身体は MSA と MSE, SA と SE の乖離と接合に焦点を絞り語ればよい。これは受動身体には固記号の言説が、能動身体には閉記号の言説が、差異身体には開記号の言説がふさわしいことを物語ってはいないだろうか。

いや、もう少し考えてみよう。ベクトルの方向が一方向、双方向、自由となるとこの関係は包含関係である。ベクトルの概念は、記号の中心原理であり、この原理からすると固記号は閉記号の、閉記号は開記号の部分集合となるのではないか。これは言説の三様相にも応用可能である。対象が受動身体の場合は言説の三様相で語ることは可能である。ところが、能動身体は、閉記号の言説と開記号での語りが可能で、固記号では能動身体を受動身体としての部分しか語り得ない。そして、差異身体という対象は差異を原理とする言説がふさわしいのではないか。いや、差異身体は開記号の言説でしか語り得ないのではないか²¹⁾。

しかし、本稿での差異身体の乖離と接合の語りを考えると、これまでの言説は固記号の言説となっている。つまり、非対称で、一方向で、遡及禁止の性質で語っているのだ。これは、語る空間と対象の完全な分離を前提とした言説空間である。どうも差異を内在させた身体を語るにふさわしい言説とは言えない。では、語る空間と対象という二分法をはみ出し、記号

↘ と現象学も言説の三様相という基準によって同じ集合になりうる。

ちなみに、固記号の言説は天動説や落下の法則を非対称で、一方向に真理とし、コペルニクスやガリレイを裁いた教会の態度に見られよう。

なお、開記号の言説はさまざまな系を横断する記号論が考えられる。

21) 本稿はここで、言説にまで記号論を拡張するいわば、全体記号論を構想した。しかし、記号論を対象にのみ限定するいわば部分記号論も可能である。部分記号論には実証主義、現象学に続く第三の言説の可能性がある。一方、全体記号論は実証主義、現象学に続く第三の言説ではなく、別次元の言説となる。

の構成要素として対象に入り込み、また、対象から語ることを試みてはどうだろう。実際、闘ってみるのである。しかし、これは語る空間と対象との豊かな(?)交流はあるものの、言説空間は閉じている。これは閉記号の言説である。

差異身体について語ろうとする時、語る空間さえも特権的な空間ではなくなる²²⁾。差異を内包した対象は固記号の言説も閉記号も解体させていくのだ。開記号を内包させた「闘う身体」には〈外〉という特権的な空間はないのではないだろうか。決して均質な空間ではない記号空間の中で対象と語る位相が自由に切断・接続すること、文字・論文という語り、身体技法という語り、議論するという語り、日常生活で、あるいは郵便局での語り、さまざまな語りの制度と自由に切断したり、自由に接合することが闘う身体 of 語る位相ではないだろうか。記号空間の部品として語り続けること、しかもゴムのように伸縮自在な部品として語ることこそが「闘う身体」の語り方ではないだろうか。

対象のみならず、語る空間と対象もすべてが開記号によって覆い尽くされた風景を想像するとき、私たちは世界も自我も解体するような殺伐とした気分襲われる。しかし、すぐ次の瞬間、懐かしさにも似た奇妙な既視感にも見舞われる。それはフッサールのエポケーともウィトゲンシュタインの言語ゲームともフーコーの〈外〉とも微妙に違う、ドゥルーズ＝ガタリのリゾームと触れたときのあの感覚の再現である。開記号はこれらの言説の秩序とどこかで深くつながっているのではないだろうか²³⁾。

22) 固記号の言説、閉記号の言説、開記号の言説のいずれの言説を選択するかにより解が変わってくる。

23) エポケーで開示される静かな世界、言語ゲームで開示される語る空間の消滅、フーコーの〈外〉から聴こえる声は新しい言説の空間を提示している。また、ドゥルーズ＝ガタリのリゾームはとてつもない量とスピードのベクトルが飛び交っている。いわば、ポジティブな世界の構築である。いずれも言説の秩序に新しい可能性を含んでいるが、本稿では、示唆にとどめ、別の機会に詳しい検討をすることとする。

さて、私は少しばかり夢を見すぎたようだ。闘う身体には開記号の言説こそがふさわしいことを提示して、ひとまず、本稿を終えることとする。

おわり

参考文献

- Barthes, Roland 1967 *Système de la Mode*, Seuil. = 1972 佐藤信夫訳『モードの体系』みすず書房。
- Deleuze, Gilles et Felix Guattari 1972 *L'Anti-OEdipe*, Minuit. = 1986 市倉宏祐訳『アンチ・オイディプス』河出書房新社。
- 1980 *Mille Plateaux*, Minuit. = 1994 宇野邦一・小沢秋広・田中敏彦・豊崎光一・宮林寛・守中高明訳『千のプラトー』河出書房新社。
- Foucault, Michel 1969 *L'Archéologie du savoirs*, Paris: Gallimard. = 1995 中村雄二郎訳『知の考古学』河合出書房新社。
- 1971 *L'ordre du discours*, Paris: Gallimard. = 1995, 中村雄二郎訳『言語表現の秩序』河出書房新社。
- 市川 浩 1975『精神としての身体』勁草書房。
- 1977『身体の現象学』河出書房。
- 1984『〈身〉の構造』青土社。
- 今田高俊 1986『自己組織性』創文社。
- 井上 俊 1993「スポーツ社会学の可能性」『スポーツ社会学会研究』1: 35-39。
- 井上 俊他編 1996『岩波講座 現代社会学 4 身体と間身体社会学』岩波書店。
- 金田 晉 1973「〈現象学運動〉の展開」『現代思想 創刊号』1: 133-145。
- 河本英夫 1995『オートポイエーシス』青土社。
- 木田元他編 1980『講座・現象学』（全4巻）弘文堂。
- 落合仁司 1995『地中海の無限者』勁草書房。
- 大澤真幸 1990『身体の比較社会学Ⅰ』勁草書房。
- 1992『身体の比較社会学Ⅱ』勁草書房。
- 盛山和夫 1986「社会学における理論の発展のために」『理論と方法』1: 71-86。
- 1995『制度論の構図』創文社。
- 社会学研究会 1991『ソシオロジ 小特集／身体と社会』111。
- 内田隆三 1979「社会学史入門 I」『ソシオロギス』3: 176-197。
- 1980「〈構造主義〉以後の社会学的課題」『思想』676: 48-70。
- 1984「フーコーの望遠鏡」『思想』718: 209-234。

広島修大論集 第 40 卷 第 1 号 (人文)

亘 明志 1986 『記号論と社会学—記号論の彼方／外部としての権力—』 広島修道大学研究叢書。

——— 1996 「権力の記述と文体」『岩波講座 現代社会学 16 権力と支配の社会学』 岩波書店。

Wittgenstein, Ludwig 1936–1949 *Philosophische Untersuchungen*, (MS). = 1986 藤本隆志訳 『ウィットゲンシュタイン全集 8 哲学探究』 大修館書店。

Summary

Where should the body to fight be addressed?

——One consideration by applying semiotics to the body
of Karate and the order of statement ——

Tomonori Ooyama and Ryounosuke Yuasa

The purpose of this paper is to show the phase that deals an object called the body to fight. The object is the body of Karate as martial arts, and semiotics is used as a method. The concept of three aspects of a sign is consisted of the relations between *signifiant* and *signifié*. One is called solid-sign, and it is asymmetrical and has one direction. Another is closed-sign, and it alternates in two directions. The last one is open-sign, which aims at other signs. If this concept is applied to the body, the concept of a passive body, an active body, and a difference body can be derived respectively.

Moreover, the body which refers to these objects is also the body itself. Then, when three aspects of a sign were applied also to this relationship, the concept of solid-sign of statement, closed-sign of statement, and open-sign of statement was derived.

If an object is open-sign, it will prove that only the open-sign of statement is suitable for taking it up.

Incidentally, the body to fight contains the body that makes the open-sign a principle.

As mentioned above, it comes to the conclusion that the open-sign of statement is optimum for addressing the body to fight.